

MBA教育の曲り角

この夏もシカゴの夜学MBAで社会人を教えている。二〇〇八年九月のリーマン危機以降二年になるのに、景気はさっぱり明るさを見せず、失業者も9%台で高止まり。同僚の教授たちに聞いても、消費や景気の先行きに悲観的な話が多い。私のクラスの一九人の夜学生を見ても、三割が失業者で、MBA取得後も仕事があるか不安に思っている。金融危機で年金資金を失ったベビーブーマーが退職を延ばしているしわ寄せが、若い人たちの求職難につながっている。

書店の経済書のコーナーを覗くと、資本主義の将来に対する疑問や、短期利益追求の企業行動に対する反省の書など、悲観的な本が多い。その中で、MBAの現状を反省し、将来の方向を語る良書があったので紹介したい。

著者の三人の教授たちを中心とする、MBA教育を見直そうというハーバード・ビジネススクール(HBS)のプロジェクトは二〇〇七年に始まった。ビジネス環境の大きな変化にビジネス教育が取り残されているのではないか、グローバルゼーションとリーダーシップの挑戦にどう対応し、その中でいかに自己を確立したイノベーションの主体となる人材を育てるのかという問題意識が、その背景

にあった。

そこで、著者たちはアメリカの上位MBAコースのカリキュラム・データを集め、主要校の学長などにインタビューを行い、問題点と変化の方向を探った。その成果は、二〇〇八年半ば一〇〇周年を迎えたHBSで、多くの教員を集めた検討会で披露された。さらに、直後の金融危機を踏まえ、なぜMBA教育がリスクや危機対応に役に立たなかったのかという反省を加えて、追加のヒアリングを行い、この本にまとめている。

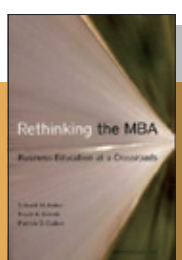
MBA教育の曲がり角という副題を持つ本だけに、現在のMBA教育の不足や弱点を真摯に反省し、学生や採用企業からの不満に耳を傾けて、学生に付加価値を与えるMBA教育を目指すための具体的な提言が書かれている。要点は次のようにまとめられる。

知識(knowing)に重点が置かれた従来の教育から、より実践(doing)やあり方(being)にバランスを置いた教育へ。つまり、(事実、枠組み、理論といった金融や組織などの)知識に偏った教育ではなく、(経営のスキル、能力、技術の展開を図る)実践的教育と、(経営管理者の世界観やプロフェッショナルな存在意義を形成する)価値や信念、態度といったことに目を向けたカリキュラムを作っていく重要性である。

この本の後半で紹介されるハーバード、エール、スタンフォード、INSEADなどの一流校の事例では、いずれも実戦を経験するアクション・ラーニングやリーダーシップ形成のためのチームワーク教育などが、すでになりにカリキュラムの中に取り入れられている。二〇〇〇年代に入り、アメリカの伝統的な二年間のフルタイムのMBAコース志願者は低落傾向にあるのだが、トップ一〇校では学生数は減っていないのに対し、一五位から三〇位の中学校の学生数が激減している。学科長とこの本の内容を議論したところ、上位校は十分な資源があるので、環境変化に適応した行動をさきがけてとっているのに対し、中位校以下になると十分な資源がなく、柔軟なカリキュラム対応などもできなくて、結局競争に脱落しているとのことであった。特に金融危機後は、優秀な学生が非営利的なキャリアに興味を持ち始めたことや、高騰した授業料と、報酬の高い金融機関へ職を得る機会が減ったことで、MBA教育投資に対するリターンが期待できなくなっていることが大きいという。

環境変化に柔軟に対応しようとする一流ビジネススクールの具体的な最新の動きがよくわかるので、MBA教育に興味がある皆さんにお勧めしたい。

(二〇一〇年八月にDaPaui University 経営大学院へ)



Rethinking the MBA: Business Education at a Crossroads

Srikant M. Datar, David A. Garvin, and Patrick G. Cullen
Harvard Business School Press / 2010



筆者のMBA授業風景